孔融の人物評價

髙橋康浩

はじめに

孔子の二十世孫たる孔融は、陳琳・王粲・徐幹らとともに建安文學の一翼を擔った文人として名を殘す。他方、儒家本流の家系に生まれた孔融は、學校を設立して儒學を奬勵したり、肉刑復活を批判するなど、儒教的價値觀に基づいた施策を展開していく。[1] かかる文學者・儒者としての一面もさることながら、『後漢書』の本傳に見える次の一文にも注目すべきである。

（孔）融人の善を聞けば、諸（これ）を己より出だすが若く、言に採る可き有れば、必ず演べて之を成す。面して其の短を告ぐるも、而れども退きて長ずる所を稱す。賢士を薦達し、奬進する所多く、知りて未だ言はざるは、以て己が過ちと爲す。故に海内の英俊は皆な之に信服す（『後漢書』列傳六十 孔融傳）。[2]

孔融は知識人たちと交流した。黨錮の禁以降、にわかに起こる人物評價の流行は、孔融もまた無緣ではなかった。[3] むしろ、人材を知りながら稱揚しないのは己の過ちとまで捉えていたのだから、その積極性を窺えよう。

本稿は、後漢後半から魏晉南北朝期にわたって隆盛していく人物の評價・鑑定について、孔融のそれを取り上げて考察する。就中、地域を絡めた人物論たる「汝潁優劣論」を中心に、孔融の政治的・人的關係とその評價の內實を探る。孔融の人物評論を定位することにより、九品中正制度へと繼承されていく人物評價の人材登用における意義が明らかになるためである。

一、知識人たちとの交流

後に人物を評價する側に立つ孔融だが、自身を最初に評價してくれたのは李膺であった。[4]「登龍門」の語源となったように、當時、高い聲望を持つ李膺とは限られた者しか接見できなかった。十歲の頃、父に連れられて京師に行った孔融は、にわかに興味を持ち、李膺のもとを訪れる。『後漢書』列傳六十　孔融傳に、[5]

（孔）融　其の人を觀んと欲し、故に（李）膺の門に造る。門者に語りて曰く、「我は是れ李君の通家の子弟なり」と。門者　之を言ふ。膺　融を請き、問ひて曰く、「高明の祖父　嘗て僕と恩舊有りしか」と。融曰く、「然り。先君の孔子と君の先人の李老君とは德を同じくし義を比べ、而して相ひ師友たり。則ち融と君とは累世の通家なり」と。衆坐　歎息せざるは莫し。太中大夫の陳煒　後に至り、坐中　以て煒に告ぐ。煒曰く、「夫れ人は小にして聰了なるも、大にしては未だ必ずしも奇ならず」と。融　聲に應じて曰く、「君の言ふ所を觀るに、將た早惠ならざらんや」と。膺　大笑して曰く、「高明　必ず偉器と爲らん」と。

とある。孔融は、李膺の祖先を李老君（老子）に見立て、孔子の代から兩家に交流があることを述べて接見を成功させた上、自分に皮肉を向ける陳煒をやり込める。李膺は大笑いして、孔融を未來の大器と評價した。こうして孔融は龍門を登ったのである。

續いて十六歲の頃、孔融の名を廣めることとなる事件が起こった。『後漢書』列傳六十　孔融傳に、[6]

山陽の張儉　中常侍の侯覽の怨む所と爲り、覽　爲に章を刊りて州郡に下し、名を以て儉を捕へんとす。儉　融の兄の褒と舊有り、亡れて褒に抵るも、遇はず。時に融は年十六、儉　之を少しとして告げず。融　其の窘色有るを見、謂ひて曰く、「兄は外に在りと雖も、吾れ獨り君の主爲ること能はざるか」と。因りて留めて之を舍らしむ。後に事泄れ、國相より以下、密かに就きて掩捕せんとするも、儉　脫走するを得、遂に幷せて褒・融を收へて獄に送る。二人未だ坐する所を知らず。融曰く、「保納舍藏せし者は融なり。當に之を坐すべし」と。褒曰く、「彼來りて我を求む、弟の過に非ず。請ふらくは其の罪に甘んぜん」と。吏　其の母に問ふ。母曰く、「家事は長に任ず。妾　其の宰に當たらん」と。一門　死を爭ひ、郡縣　疑ひて決する能はず、乃ち之を上讞す。詔書もて竟に褒を坐す。融　是に由りて名を顯し、平原の陶丘洪・陳留の邊讓と聲稱を齊しくす。

とある。宦官侯覽に指名手配された兄の舊友張儉が逃亡してくると、孔融は不在の兄に代わり張儉を匿った。後にこの件が露見すると、孔融は匿った當事者として、孔褒は自分を賴ってきたことを理由に、母親は年長者の責任として、各々が自分を罰するよう主張した。結局、孔褒が罪に處せられたが、この事件をきっかけに、孔融の名は知れ渡ることとなり、平原の陶丘洪・陳留の邊讓と齊名を持つに至ったのである。

その後、司徒楊賜の府、および大將軍何進の辟召を經て、北海相に任ぜられた。初平元（一九〇）年よりおよそ六年に渡って在任するこの青州の地にて、孔融は、黄巾討伐を行った他、學校を設立して儒學を奬勵するとともに、鄭玄・邴原らを察舉した。とりわけ鄭玄に對する評價は高く、鄭玄のいた高密縣にわざわざ「鄭公鄉」なる鄉を作るほどであった（『後漢書』列傳二十五　鄭玄傳）。川勝義雄は、孔融・鄭玄らを中心とした清流知識人の集團の存在を指摘する。[7]「清流」という括りは疑問だが、孔融・鄭玄らの派閥が形成されたという見解は首肯しうる。かかる孔融・鄭玄らによる北海を中心とした知識人集團、すなわち「北海グループ」に屬する人物としては、王朗（徐州東海）・華歆（青州平原）・邴原（青州北海）・王脩（青州北海）・管寧（青州北海）・國淵（青州樂安）・崔琰（冀州清河）・崔林（冀州清河）・王基（青州東萊）・盧毓（幽州涿郡）らが擧げられる。鄭玄を除き、彼らはいずれも曹魏政權に仕えた。崔琰のように當初は袁紹に仕えた者もいたが、袁氏の衰退・滅亡とともに曹魏に鞍替えしている。[8]

この他にも孔融は、謝該（荆州南陽）・禰衡（青州平原）らを推薦する上書を著し、それらが今日に殘る。孔融は李膺に評價されて以來、名聲を積み上げ、かかる知識人層を代表する人物として後漢末に名を馳せる。そして、建安元（一九六）年に曹操が獻帝を擁立した後は、漢の少府として、曹操の施策を幾度となく批判していく。[9]こうした中で孔融は、同僚の陳羣と人物評論を交わすこととなる。

二、「汝潁優劣論」に見える評價基準

後漢後半期、汝南出身の陳蕃が「三君」、潁川出身の李膺が「八俊」として黨人たちの指導者的立場にあったことから、豫州の汝南・潁川兩郡は、知識人層の中心活動地域となった。[10]かかる地域出身の人物について論じたものが、孔融の「汝潁優劣論」である。これは地域論を絡めた人物評論の嚆矢であり、のちに盧毓と何晏が繰り廣げた「冀州論」へと繋がるものと理解できる。[11]では、『藝文類聚』卷二二　人事部　品藻に引かれる「汝潁優劣論」を、『太平御覽』卷四四七　人事部所引により補いつつ見ていきたい。[12]

①汝南の戴子高、親ら千乘萬騎を止め、光武皇帝と共に道中に〔揖す〕。潁川の士は抗節ありと雖も、未だ天子に頡頏する者有らざるなり。②汝南の許子伯、其の友人と共に世俗の將に壞れんとするを說き、因りて夜に〔起き〕、聲を擧げて號哭す。潁川〔の士〕は頗る時を憂ふと雖も、未だ能く世を哭する者有らざるなり。③汝南府の許掾、太守の鄧晨に教へ、圖りて稻陂を開き、數萬頃を〔灌す〕。累世　其の功を獲、夜に火光の瑞有り。韓元長は地理を好むと雖も、未だ功を成し效を見はすこと許掾の如き者有らざるなり。④汝南の張元伯、身死するの後、

夢に范巨卿を見る。潁川の士は奇異有りと雖も、未だ能く神にして靈する者有らざるなり。⑤汝南の應世叔、書を讀めば五行 俱に下る。潁川の士は聰明なるもの多しと雖も、未だ能く離婁と並び照らす者有らざるなり。⑥汝南の李洪、太尉掾爲りしとき、弟 人を煞して死に當る。洪自ら劾して閤に詣り、弟の命に代らんことを乞ひ、便ち酖を飲みて死す。弟 用て全きを得たり。潁川〔の士〕は節義を尚ぶと雖も、未だ能く身を煞して仁を成すこと洪の如き者有らざるなり。⑦汝南の翟〔文仲〕、東郡太守と爲り、始め義兵を擧げて以て王莽を討つ。潁川の士は惡を疾むと雖も、未だ能く家を破りて國の爲にする者有らざるなり。⑧汝南の袁公著、甲科郎爲りしとき、上書して梁冀を治めんと欲す。潁川の士は忠讜を慕ふと雖も、未だ能く命を投げて直言する者有らざるなり。

これに對する陳羣の返答が『三國志』巻十 荀彧傳注引『荀氏家傳』に見え、[13]

陳羣 孔融と汝・潁の人物を論ず。羣曰く、「荀文若・公達・休若・友若・仲豫は、當今並びに對無し」と。

と述べる。陳羣は、義父の荀文若（荀彧）を筆頭に、公達（荀攸）・休若（荀衍）・友若（荀諶）・仲豫（荀悅）ら「潁川の荀氏」を擧げて、潁川人士を批判する孔融に反論した。潁川郡出身の荀彧を中心とした知識人集團は、曹操政權において重きをなしており、彼らによって支えられていたのである。[14]

おおよその内容をまとめてみよう。論中で擧げられた汝南人士は、①戴子高（戴遵。『後漢書』列傳七十三 逸民傳）・②許子伯（許劭。『後漢書』列傳五十八 許劭傳）・③許掾（汝南郡の都水掾たる許楊。『後漢書』列傳七十二 方術傳）・④張元伯（張劭。『後漢書』列傳七十一 獨行 范式傳）・⑤應世叔（應奉。『後漢書』列傳三十八 應奉傳）・⑥李洪（詳細不明）・⑦翟文仲（翟義。『漢書』巻八十四 翟方進傳）・⑧袁公著（袁著。『後漢書』列傳二十四 梁冀傳）の八名である。孔融はこれら汝南人士を稱揚する一方、潁川人士については韓元長（韓融。『後漢書』列傳五十二 韓韶傳附韓融傳）以外に名を擧げず、[15]①抗節があり、②時を憂い、③地理を好み、④奇異であり、⑤聰明であり、⑥節義を尚び、⑦惡を疾み、⑧忠讜を慕う、という多彩な評價點を基準にしつつ、汝南人士が潁川人士に勝ることを論ずる。以下、本稿では諱の方を表記する。

「汝潁優劣論」については、勝村哲也がすでに論じており、[16]勝村は、戴遵・許揚・翟義を前漢末から王莽期の人物、許劭・應奉・袁著を後漢末から曹操期の人物と整理した上で、汝南人士を抵抗型知識人、潁川人士を體制順應型知識人と分類する。[17]すなわち、現王朝を支えていこうとする者と、新王朝に向けて積極的に順應していこうとする者とを、それぞれの郡に分けて對比したとする。孔融の當時であれば、汝南は護漢派、潁川は親魏派ということもできる。また勝村は、孔融が知識人の評價を行うに當たっては儒學的特性を極度に重んじる人物であり、かつ漢室に仇する權勢に對し、知識人の自律的な行動をひたすら要請する士と理解する。これらは概ね首肯し得る見解である。さらに、「汝潁優劣論」の完成時期を、

論争相手の陳羣が曹操幕下の人事擔當官である司空西曹掾屬となった建安三（一九八）年からその翌年と想定する。人物をめぐる論争であったことを考えれば、これも充分に納得できる。「汝潁優劣論」は、人事擔當者に向けた、現實との關わりの中から生まれたものである。論の想定完成年は、後漢末の群雄の中で擢んでた曹操と袁紹が、官渡の戰いで雌雄を決する直前に當たる。しかも、兩者は後述するように汝南に深い關わりを有する。かかる時閒的背景と情勢を踏まえれば、孔融と陳羣の議論において、曹操と袁紹に對する配慮なり批判なりを込めたと見るべきである。本稿はこの觀點より論じてみたい。

まず、曹操についてだが、これは「汝潁優劣論」②の許劭と關連する。許劭は郭泰とともに人物評價で名を知られた。その彼が、「君は清平の姦賊、亂世の英雄」（『後漢書』列傳五十八　許劭傳）と批評を下した相手が曹操であった。[18] 渡邉義浩は、さして高い評價でもないが、これにより曹操が汝南を名聲の場とし、汝南「名士」社會の仲閒入りを果たしたと論ずる。[19] したがって、曹操と汝南の關わりは深い。その一方で、曹魏政權の中で、汝南出身で『三國志』に專傳を持つ者は和洽しかいないことも合わせて指摘する。曹操は、獻帝を擁立して漢を輔佐することで政權の正統性を獲得していたため、立場上は曹操も護漢派と言える。だが、「護漢派」たる曹操に仕えた孔融の曹操認識として、次のような文がある。

時に袁（紹）・曹（操）方に盛んなり。而るに（孔）融　協附する所無し。左丞祖なる者、意謀有りと稱し、融に勸めて結納する所有らしめんとす。融（袁）紹・（曹）操の終に漢室を圖るを知り、與に同するを欲せず。故に怒りて之を殺す（『後漢書』列傳六十　孔融傳）。[20]

袁紹・曹操の勢いが盛んな狀況にあって、孔融は兩者が漢室を蔑ろにする者と認識し、いずれにも與せぬ態度を取ったのである。渡邉義浩は、勝村の說を踏まえた上で、「汝潁優劣論」が曹操に迎合する潁川人士を批判するために著されたものとする。[21] 例えば「汝潁優劣論」③は、許楊の灌漑により收穫が增加したことを稱えることで、潁川で行われていた曹操の屯田制を暗に批判したと見ることができる、というのである。曹操は沛國譙縣出身なので、「汝潁優劣論」內に直接言及することはもちろんない。だが、これらを總合すると、汝南人士を稱揚する孔融の意圖の背後には、汝南を名聲の場に持ちながら、その汝南人士をほとんど麾下に加えられず、使いこなせない曹操へのあてつけがあると見ることができよう。その曹操に重用される潁川人士は、孔融にとって格好の批判の的だったのである。

次に、袁紹との關わりを檢討したい。注（16）所揭勝村論文が、「汝潁優劣論」における袁紹への同情の有無に言及し、前引の『後漢書』孔融傳を以て、同情的であったとは言えないと一應の答えを提示する。[22] これについても「汝潁優劣論」②の許劭との關連より考察できる。そもそも許劭は、從祖父の許敬、子の許訓、孫の許相と三代にわたり三公を輩出した三世三公の家柄で、「汝南の許氏」と言えば當時の名族である（『後漢書』列傳五十八　許劭傳）。一方の袁氏は、やはり汝南を本貫とし、後漢前半期の袁安以降、四世代にわたり三公を五人も輩出した許氏を上回る家柄で

ある[23]（『後漢書』列傳三十五　袁安傳）。袁安から後漢末の袁紹・袁術に至る「汝南の袁氏」本流は、漢を輔佐してきたことを自らの存立基盤とする一族であり、「汝潁優劣論」で稱揚された汝南人士に劣らぬ護漢派と言える。ところが孔融は、かかる「汝南の袁氏」本流を無視する[24]。ここに見られる孔融の姿勢は、勝村説に加え、次の理由も擧げられよう。

（袁）譚　始め青州に至りて、都督と爲るも、未だ刺史爲らず。後に太祖　拜して刺史と爲す。其の土は河よりして西し、蓋し平原を過ぎざるのみ。遂に北のかた田楷を排し、東のかた孔融を攻め、兵を海隅に曜かす。是の時、百姓は主無く、欣んで之を戴けり。然れども羣小を信用し、近言を受くるを好み、志を肆にして奢淫し、稼穡の艱難を知らず。華彥・孔順は皆な姦佞の小人なるも、信じて以て腹心と爲す。王脩らは官を備ふるのみ（『三國志』巻六　袁紹傳注引『九州春秋』[25]）。

袁紹の長子袁譚は、青州の孔融を攻撃した。『後漢書』の孔融傳によれば、この時の攻撃で孔融の妻子が捕虜となる。しかも袁譚は小人を信用し、「北海グループ」の一人である王脩を重用しなかった[26]。孔融は、後漢を無みする者として袁紹たちを認識していた上に、かかる個人的かつ派閥的な確執もあったのである。

ちなみに、袁紹の從兄弟で同じく「汝南の袁氏」本流たる袁術については、『三國志』巻三十二　先主傳に[27]、

先主曰く、「袁公路　近く壽春に在り。此の君は四世五公にして、海内の歸する所なれば、君　州を以て之に與ふ可し」と。……北海相の孔融先主に謂ひて曰く、「袁公路　豈に國を憂へ家を忘るる者ならんや。冢中の枯骨にして、何ぞ意を介するに足らん。今日の事、百姓　能に與す。天　與へて取らざれば、悔ゆとも追ふ可からず」と。

とある。興平元（一九四）年、陶謙の死後に徐州を讓られ、それを袁術に委ねようとする劉備を、孔融は制止した。袁術は家を顧みず國を憂える者ではなく、墓中の朽骨に過ぎぬ、と。孔融の袁術評價は的中し、建安二（一九七）年、袁術は漢を蔑ろにして帝號を僭稱する。如上のことから、「汝潁優劣論」において、袁紹（および袁術）を含む「汝南の袁氏」本流に對する同情がないのも理由がつく。彼らに觸れぬことで、却って批判していると見ることができよう。

同時に、注目すべきは、袁術評價の内容である。「豈に國を憂へ家を忘るる者ならんや」とは、表現こそいささか異なれど、「汝潁優劣論」⑦の「家を破りて國の爲にする者」という基準と同質のものと見てよい。かかる評價基準は、「汝潁優劣論」のような政治的談論が、實際の人物評價と深い關わりを持っていたことを示すものである。

三、人材推擧の上書

「汝潁優劣論」は陳羣との論爭において展開された郡單位の人物評價であり、議論の政治性は極めて高い。ところが、岡村繁は、「汝潁優劣論」を含めた後漢末の政治的談論の特色について、「これらの諸論は、決着がどう落ち着いてもさして現實生活に影響のない、現實から遊離した閑問題をとらえている」とし、「談論のための談論、極言すれば、有閑的氣分の極めて濃い談論であると言える」と述べている。[28] すなわち、相手をやり込めるための空理空論を展開しているとするのである。そこで、孔融が推擧した人物についての上書を手がかりに、「汝潁優劣論」の評價基準と比較してみたい。まずは謝該の例を見てみよう。

少府の孔融 上書して之を薦めて曰く、「……竊かに見るに、故の公車司馬令の謝該は、❶曾（參）・史（魚）の淑性を體し、（卜）商・（言）偃の文學を兼ね、博く羣藝に通じ、周く古今を覽、物來つては應ずること有り、事至つては惑はず、清白異行にして、敦く道訓を悅ぶ。之を遠近に求むるに、疇匹有ること少なし。……❷雋不疑は北闕の前に定め、夏侯勝は常陰の驗を辯じ、然る後に朝士益々儒術を重んず。今該は實に卓然として跡を前列に比ぶ。……」と（『後漢書』列傳六十九下 儒林下 謝該傳）。[29]

孔融は、❶曾參・史魚・卜商（子夏）・言偃（子游）といった春秋時代の人物の名を擧げて、その能力を評價する。曾參は「孝」、卜商と子游は「文學」により名を知られる孔子の弟子たちである。謝該はかかる儒者たちの特性を兼ね備えた人物とする。そして注目すべきは史魚であろう。史魚は、『論語』衛靈公篇に、「子曰く、直なる哉 史魚。邦に道有れば矢の如く、邦に道無ければ矢の如し」とある。[30] 春秋時代の衛の大夫であり、賢人の蘧伯玉を用いて小人の彌子瑕を退けるよう、主君の靈公に直言してたびたび諫めた。矢の如き「直」は、孔子の認めるところとなったのである。すなわち、これは「汝潁優劣論」⑧と同じ基準であり、謝該はそれを備えた人物として評價している。

さらに孔融は、❷雋不疑と夏侯勝の名を擧げ、謝該がこれら先人と同列に並ぶ者であると示す。雋不疑は、始元五（前八二）年に衛太子を自稱する者が現れた際、『春秋』の義を以て、躊躇なく收縛した人物である（『漢書』卷七十一 雋不疑傳）。謝該は、數百人の門弟を擁した左氏學者であったことから、ともに『春秋』を修めたという共通點により雋不疑を擧げたのであろうか。[31] かたや、夏侯勝は、『漢書』卷七十五 夏侯勝傳に、[32]

會々昭帝 崩ずるや、昌邑王 嗣ぎて立ち、數々出づ。（夏侯）勝 乘輿の前に當りて諫めて曰く、「天久しく陰りて雨ふらざるは、臣下に上を謀らんとする者有ればなり。陛下出でて何くにか之かんと欲する」と。王怒り、勝を謂ひて祅言と爲し、縛りて以て吏に屬く。

とあるように、昌邑王（廢帝劉賀）の放蕩に諫言を呈したことで不興を買い、捕らわれた人物である。こちらは、「汝潁優劣論」⑧と合致する。

これ以外の評價部分もあるが、いずれにせよ、「汝潁優劣論」と同じ基準によって、謝該を推薦したことが理解できよう。

上書が殘る人物としては、次に禰衡が擧げられる。兩者は二十歳の年齢差がありながらも親しく交わり、互いに評價し合った。[33] 孔融による禰衡の推薦文は、『後漢書』列傳七十下 文苑下 禰衡傳に、[34]

……竊かに處士なる平原の禰衡を見るに、年二十四、字は正平、淑質貞亮にして、英才卓礫たり。初め藝文に渡り、堂に升りて奥を覩、❶目の一たび見る所、輙ち口に誦し、耳の瞥聞する所、心に忘れず。性は道と合し、思ひは神有るが若し。❷「(桑)弘羊の潛計、(張)安世の默識、衡を以て之を準ぶるに、誠に怪しむに足らず。❸忠果正直にして、志は霜雪を懷き、善を見ること驚くが若く、❹惡を疾むこと讎の若し。❺任座 行ひを抗げ、史魚 節を厲ますも、殆ど以て過ぐること無きなり。鷙鳥 伯を累ぬるは、一鶚に如かず。衡をして朝に立たしめば、必ず觀る可き有らん。……

とある。孔融は、❶一見・一聞のみで覺えてしまう禰衡の驚異的な記憶力を擧げる。この評價基準は、「汝潁優劣論」⑤と合致する。なぜなら、⑤で稱揚された汝南人士の應奉は、『後漢書』列傳三十八 應奉傳に、[35]

(應)奉 少くして聰明、童兒爲りしより長ずるに及ぶまで、凡そ經履する所、暗記せざるは莫し。書を讀めば五行並びに下る。

とあるように、童兒の頃から成人するまで、自ら經驗したものをすべて記憶し、書物を五行まとめて讀んで覺えるほどの人物であったからである。合わせて孔融は、❷桑弘羊の潛計(暗算)と張安世の默識(記憶力)を引き合いに出し、禰衡はそれを凌ぐものと打ち出す。とりわけ後者は、『漢書』卷五十九 張湯傳附張安世傳に、[36]

上 河東に行幸するや、嘗て書三篋を亡ふ。詔して問ふも、能く知るもの莫く、唯だ(張)安世のみ之を識り、具に其の事を作る。後に購ひ求めて書を得、以て相ひ校するも、遺失する所無し。

とあるように、三箱の書物を漏らさず覺えるほどの記憶力を持っていた。これは❶と同様、「汝潁優劣論」⑤に該當しよう。應奉・張安世のごとき記憶力は、孔融にとって、れっきとした評價基準であったと言える。

この他にも、❸「忠果正直」とは、忠義で正しくまっすぐなことを意味し、これは「汝潁優劣論」⑦に該當する。そして、❹「惡を疾むこと讎の若し」もまた、「汝潁優劣論」⑦と同じ評價基準である。禰衡はこれらに合致していた。さらに孔融は、❺任座と史魚の名を擧げる。史魚は先に說明したとおりである。一方で、任座は、『呂氏春秋』不苟論に、[37]

魏の文侯 燕飲し、皆な諸大夫をして己を論ぜしめ、或ひと君の智を言ふなり。任座に至るや、任座曰く、「君は不肖の君なり。中山を得て、

以て君の弟を封ぜず、而して以て君の子を封ず。是を以て君の不肖なるを知るなり」と。文侯 說ばず、顏色に知はる。任座 趨りて出づ。次に翟黃に及ぶや、翟黃曰く、「君は賢君なり。臣聞くならく、『其の主の賢なる者は、其の臣の言 直なり』と。今者、任座の言 直なり。是を以て君の賢を知るなり」と。

とあるように、魏の文侯に直言を吐いた戰國時代の人物である。直言により君主の不興を買った逸話の殘る任座を、史魚と並稱した。孔融はかかる性質を禰衡の中に見、任座・史魚以上の人物と評價したのである。

謝該・禰衡以外にも、孔融は舊知の盛憲という人物を推薦している。盛憲は江東で名望を有しており、この地を支配下に置いた孫吳は、盛憲を恐れて捕らえてしまう。孔融は、直ちに盛憲を召すよう曹操に書を送った。『三國志』卷五十一 孫韶傳注引『會稽典錄』に、[38]

歲月居らず、時節流るるが如し。五十の年、忽焉として已に至る。公 始めて滿つることを爲し、融は又た二を過ぐ。海內の知識、零落して殆ど盡き、惟だ會稽の盛孝章のみ尙ほ存せり。其の人孫氏に困しめられ、妻孥湮沒し、單孑獨立し、孤危愁苦す。……今 孝章は實に丈夫の雄なり。天下譚士は依りて以て聲を揚ぐ。而れども身は幽執を免れず、命は旦夕を期せず。❶是れ吾が祖の當に復た損益の友を論ずべからず、而して朱穆の絕交する所以なり。公 誠に能く一介の使を馳せ、咫尺の書を加ふれば、則ち孝章をば致す可く、友道 弘む可きなり。……

とある。孔融五十二歲の時、すなわち建安九（二〇四）年に作られたものである。❶の「損益の友」とは、『論語』季氏篇の、「孔子曰く、益者三友、損者三友。直を友とし、諒を友とし、多聞を友とするは益なり。便辟を友とし、善柔を友とし、便佞を友とするは損なり」に基づく。[39] 盛憲をこのまま見殺しにしては、祖先孔子も「損益の友」を論ずることができないという。換言すれば、盛憲は孔融にとっての益者三友である。直（正直）・諒（誠心）・多聞（博學）のいずれか、あるいはいずれも備えた人物ゆえに、曹操に推薦して孫吳より救出してもらうことを望んだ。盛憲を薦めたこの文書は、先の二人と異なり、いささか緊急避難的な意圖が强い。いずれにせよ、「損益の友」という文言に包含される「直」は、「汝潁優劣論」⑧に、「多聞」もまた⑤に近いものと言え、ここにも「汝潁優劣論」と同樣の評價基準を窺える。

このように見ていくと、「汝潁優劣論」は、決して空理空論の評價基準を展開したわけではない。注（28）所揭岡村論文が述べるような「有閑的氣分の極めて濃い談論」ではないのである。岡村が主張する「談論の宮廷化」は、九品中正制度が人物評價を基準とするものから、爵位により定まるようになる西晉期以降の清談にこそ求めるべきではないか。[40] むしろ、孔融の人物評價において重視すべき點が明確に含まれていたと言えよう。[41] 政治的談論たる「汝潁優劣論」にも、人物の推薦文にも、共通したものが見られる以上、人材とはかくあるべきという孔融の確固たる姿勢を窺うことができるのである。[42]

おわりに

知識人と交流して「北海グループ」を形成した孔融は、曹魏の同僚たる陳羣と論争を交わし、「汝潁優劣論」によって汝南人士を稱揚するとともに、潁川人士を批判した。そこには、汝南を名聲の場とし、自らが仕えた曹操、および曹操と覇權を爭った「汝南の袁氏」本流たる袁紹に對する批判を込めたものであった。一方、「汝潁優劣論」にて展開された評價基準は、實際に人物を推薦する際の上書にも見られ、孔融の人物評價における確たる基準となっていたのである。

かかる規範は、孔融の推薦文には「直」であることを特に重視していた。孔融は、自身が漢を無みする者と認識しつつも、一定の距離を置きながら曹操に仕え、曹操が禁酒令を發布した時や、烏桓征伐した時などには嚴しく批判し、時に嘲弄を浴びせた。友人の脂習は、孔融のかかる「直」を常々戒めていたが、その危惧は的中する。孔融は曹操に疎まれ、ついに處刑されてしまうのである。[43] 注（1）所掲の曹丕による評價のごとく、詭弁を弄する皮肉家として見られることの多い孔融であったが、實は自らの評價基準を確固として持ち、それを實踐していた人物と言えよう。

九品中正制度が人物評價ではなく、爵位を基準として運用される以前、人物評價は極めて強い政治的指向性を有していた。孔融の「汝潁優劣論」は、のちの清談の先驅となるような論理性を一方で持ちながらも、人物評價が成立した後漢の黨人たちが持っていた強い政治性を繼承しているものなのである。

注

（1）建安七子としての孔融は、曹丕より「孔融體氣高妙、有過人者。然不能持論、理不勝辭、至于雜以嘲戲。及其所善、揚・班之儔也」（『三國志』卷二十一王粲傳附阮瑀傳注引『典論』）と評されている。肉刑復活を批判した文書は、『後漢書』の孔融傳や『晉書』卷三十 刑法志に見える。

（2）融聞人之善、若出諸己、言有可採、必演而成之。面告其短、而退稱所長。薦達賢士、多所奬進、知而未言、以爲己過。故海內英俊皆信服之（『後漢書』列傳六十 孔融傳）。

（3）後漢後半における人物評價は、郭泰と許劭が中心人物であった。『後漢書』列傳五十八 郭太傳注引『泰別傳』によれば、郭泰の車は、人物評價を求める者たちの差し出した名刺で一杯になったという。また許劭は、いとこの許靖と毎月はじめに「月旦評」を行っていた。ちなみに、郭泰を評價したのは李膺で

ある。李膺の評價により、郭泰は一躍名を馳せた。ここに却って李膺の名聲の高さを窺える。

(4) 孔融が李膺のもとに赴いたのは、延熹五（一六二）年のことである。

(5) 融欲觀其人、故造膺門。語門者曰、我是李君通家子弟。門者言之。膺請融、問曰、高明祖父嘗與僕有恩舊乎。融曰、然。先君孔子與君先人李老君同德比義、而相師友、則融與君累世通家。衆坐莫不歎息。太中大夫陳煒後至、坐中以告煒。煒曰、夫人小而聰了、大未必奇。融應聲曰、觀君所言、將不早惠乎。膺大笑曰、高明必爲偉器（『後漢書』列傳六十 孔融傳）。

(6) 山陽張儉爲中常侍侯覽所怨、覽爲刊章下州郡、以名捕儉。儉與融兄褒有舊、亡抵於褒、不遇。時融年十六、儉少之而不告。融見其有窘色、謂曰、兄雖在外、吾獨不能爲君主邪。因留舍之。後事泄、國相以下、密就掩捕、儉得脫走、遂幷收褒・融送獄。二人未知所坐。融曰、保納舍藏者、融也。當坐之。褒曰、彼來求我、非弟之過。請甘其罪。吏問其母、母曰、家事任長、妾當其辜。一門爭死、郡縣疑不能決、乃上讞之。詔書竟坐褒焉。融由是顯名、與平原陶丘洪・陳留邊讓齊聲稱（『後漢書』列傳六十 孔融傳）。

(7) 川勝義雄「シナ中世貴族政治の成立について」（『史林』三三巻四號、一九五〇年八月。「貴族政治の成立」と改題・改訂し、『六朝貴族制社會の研究』、岩波書店、一九八二年に所收）は、孔融・鄭玄らの派閥を「北海グループ」と呼ぶ。彼らは相互に齊名を得たり、門生・故吏の關係にあった。また、曹魏へ仕えるに當たり、荀彧の推擧を受けた者もいる。整理すると、鄭玄（孔融より評價）、王朗（荀彧の推薦を受ける）、華歆（邴原・管寧と遊學。のちに荀彧の推擧を受ける）、邴原（孔融より有道に察擧。管寧・華歆と齊名）、王脩（王基を評價。孔融より孝廉に察擧）、管寧（邴原・華歆と齊名）、國淵（鄭玄に師事。のちに荀彧の推擧を受ける）、崔琰（鄭玄に師事）、崔林（崔琰より評價）、王基（鄭玄の說で王肅に對抗）、盧毓（盧植の子。崔琰の推擧）となる。なお川勝は、「濁流（＝宦官派）」に抵抗した「清流（＝黨人派）」という括りを「北海グループ」に適用するが、注（16）所揭勝村論文が述べるように、彼らを「清流」と措定することには再考の餘地がある。しかし、孔融・鄭玄を中心とし派閥が形成されたという見解は妥當である。本稿では、「清流」という觀點を含まず、孔融・鄭玄ら北海中心の相互に關係を有する派閥という意味で「北海グループ」という文言を使用する。

(8) 唐長孺「東漢末期的大姓名士」（『中華學術論文集』、中華書局、一九八一年）は、袁紹政權の滅亡後、崔琰が中心となって冀州の名士に序列をつけ、曹魏政權に加入させたことを指摘する。

(9) 孔融による曹操批判の例として、「嘲曹公討烏桓書」（『後漢書』列傳六十 孔融傳）、「難曹公禁酒書」（『後漢書』列傳六十 孔融傳注引『孔融集』）などがある。

(10) 「三君」「八俊」については、『後漢書』列傳五十七 黨錮列傳に見える。また、稱號の形成過程における逸話として、『世說新語』品藻篇に、「汝南陳仲舉、潁川李元禮、二人共論其功德、不能定先後。蔡伯喈評之曰、陳仲舉彊於犯上、李元禮嚴於攝下。犯上難、攝下易。仲舉遂在三君之下、元禮居八俊之上」とある。黨人の本貫については、渡邊義浩「後漢時代の黨錮について」（『史峯』第六號、一九九一年十二月。『後漢國家の支配と儒教』、雄山閣出版、一九九五年に所收）に詳しく、豫州の汝南・潁川、そして兗州の山陽から多く輩出している。

(11) 「冀州論」は、曹魏政權の後半期に曹魏派の何晏と司馬氏派の盧毓がそれぞれ著している。人事をめぐる政爭の具として利用されたもので、「汝潁優劣論」が郡單位であるのに對し、こちらは州單位である。單位が大きくなったことの背景には、特に何晏による司馬懿の州大中制への攻擊があろう。

(12) ①汝南戴子高、親止千乘萬騎、與光武皇帝共〔揖〕於道中、潁川士雖抗節、未有頡頏天子者也。②汝南許子伯、與其友人共說世俗將壞、因夜〔起〕、擧聲號哭。潁川〔士〕雖頗憂時、未有能哭世者也。③汝南府許掾、敎太守鄧晨圖開稻陂、〔灌〕數萬頃、累世獲其功、夜有火光之瑞。韓元長雖好地理、未有成功見效如許掾者也。④汝南張元伯、身死之後見夢范巨卿。潁川士雖有奇異、未有能神而靈者也。⑤汝南應世叔、讀書五行俱下。潁川士雖多聰明、未有能離婁並照者也。⑥汝南李洪爲太尉掾、弟煞人當死、洪自劾詣閤、乞代弟命、便飲酖而死、弟用得全。潁川〔士〕雖尙節義、未有能煞身成仁如洪者也。⑦汝南翟（子

戒〕〔文仲〕爲東郡太守、始舉義兵以討王莽。潁川士雖疾惡、未有能破家爲國者也。⑧汝南袁公著爲甲科郎、上書欲治梁冀。潁川士雖慕忠讜、未有能投命直言者也（『藝文類聚』巻二二 人事部 品藻引「汝潁優劣論」。〔 〕は、『太平御覽』巻四四七 人事部により補う）。なお、⑦の「翟子戒」については、該當する人物がいないため、『太平御覽』の「翟文仲」を採る。

(13) 陳羣與孔融論汝・潁人物、羣曰、荀文若・公達・休若・友若・仲豫、當今並無對（『三國志』巻十 荀彧傳注引『荀氏家傳』）。

(14) 荀氏・鍾氏・陳氏を中核とした潁川人士集團を、注（7）所掲川勝論文は「潁川グループ」と名付ける。「潁川グループ」は、孔融ら「北海グループ」と相互に密接に連絡し、士大夫たちの指導的役割を果たすものと述べる。荀彧とその一族については、丹羽兌子「魏晉時代の名族 ―荀氏の人々について―」（『中國中世史研究 ―六朝隋唐の社會と文化―』、東海大學出版、一九七〇年所收）などを參照。萬繩楠「曹魏政治派別的分野及其升降」（『歷史教學』一九六四―一、一九六四年一月）は、曹操との地緣・血緣關係を持つ「沛譙集團」を政權の基盤とし、世族地主集團たる「汝潁集團」との抗爭において曹魏政權を理解する。注（8）所掲唐長孺論文は、曹魏政權における潁川出身者の多さを、首都許縣を含む潁川郡の支配の安定と、汝南・潁川に多い名士の推擧を曹操が荀彧に促した結果とする。

(15) 『後漢書』列傳五十二 韓韶傳によると、韓融の父韓韶が亡くなると、潁川出身の李膺・陳寔（陳羣の祖父）・杜密・荀淑（荀彧の祖父）らが韓韶のために碑を立てて頌えたという。したがって、韓氏と荀氏・陳氏とは深い交流があったと理解できる。

(16) 勝村哲也「後漢における知識人の地方差と自律性」（『中國中世史研究 ―六朝隋唐の社會と文化―』、東海大學出版、一九七〇年）。

(17) 許劭の字は子將だが、「汝潁優劣論」が「子伯」につくるのはテキストの過誤と考えられる。また、李洪（『太平御覽』は李鴻につくる）については詳細不明である。李鴻の名は、『後漢書』列傳四十一 李恂傳に見えるが、潁川出身とあるため、少なくとも「汝潁優劣論」の李洪（李鴻）とは別人である。

(18) 『三國志』巻一 武帝紀注引『異同雜語』では、「子治世之能臣、亂世之姦雄」となっている。

(19) 渡邊義浩「曹魏政權の形成」（『大東文化大學漢學會誌』第四〇號、二〇〇一年三月。『三國政權の構造と「名士」』、汲古書院、二〇〇四年に所收）。

(20) 時袁・曹方盛、而融無所協附。左丞祖者、稱有意謀、勸融有所結納。融知紹、操終圖漢室、不欲與同、故怒而殺之（『後漢書』列傳六十 孔融傳）。

(21) 渡邊義浩「「史」の自立 ―魏晉期における別傳の盛行を中心として」（『史學雜誌』第一一二編四號、二〇〇三年四月。「「史」の自立」と改題して、『三國政權の構造と「名士」』、汲古書院、二〇〇四年に所收）。曹操の屯田制については、石井仁『曹操 魏の武帝』（新人物往來社、二〇〇〇年）を參照。

(22) 注（16）所掲勝村論文は、孔融による汝南人士稱揚の際、汝南出身で曹操と覇を爭った袁紹への同情が働いていたのではないかという疑問に對し、「現在のところこれに對する確かな解答はできない」としつつも、注（20）の文を引用して袁紹への同情に否定的な見解を示す。

(23) 汝南郡を本貫とする袁氏は、『孟氏易』を家學とする一族である。袁安（司徒）、袁敞（袁安の子。司空）、袁湯（袁安の孫。太尉・司空・司徒）、袁逢（袁湯の子。太尉・司空）、袁隗（袁湯の子。司徒・太尉）というように、袁氏の本流は三公を續けて輩出した。「汝南の袁氏」については、山崎光洋「後漢時代の汝南の袁氏について」（『立正史學』第五三號、一九八三年三月）を參照。

(24) 「汝潁優劣論」⑧の袁著は「汝南の袁氏」だが、袁氏の列傳を收める『後漢書』袁安傳には一切見えない。ただ、『後漢書』列傳二十四 梁冀傳に記述があり、外戚梁冀を批判する上書を奉じたことで殺されている。おそらく袁著は傍流であろう。同時期の「汝南の袁氏」には袁盱がおり、『後漢書』列傳三十五 袁安傳附袁盱傳に、「時大將軍梁冀擅朝、內外莫不阿附。唯盱與廷尉邯鄲義正身自守」とある。梁冀の專横時、阿らなかった人物として袁盱と邯鄲義を擧げ、袁著に觸れていない。袁盱は司空・司徒を歷任した袁敞の子で、梁冀打倒に功績があった。さらに袁敞の父で「汝南の袁氏」の始祖たる袁安は、外戚竇憲の專横を許さなかった。孔融が護漢派として活躍したかかる人物を無視する點は、やはり「汝南の袁氏」本流に含むところがあるのだろう。

(25) 譚始至青州、爲都督、未爲刺史、後太祖拜爲刺史。其土自河而西、蓋不過平原而已。遂北排田楷、東攻孔融、曜兵海隅。是時百姓無主、欣戴之矣。然信用羣小、好受近言、肆志奢淫、不知稼穡之艱難。華彥・孔順皆姦佞小人也。信以爲腹心。王脩等備官而已（『三國志』巻六 袁紹傳注引『九州春秋』）。

(26) 王脩は孔融が自ら孝廉に察舉した人物である。同じ「北海グループ」の崔琰も袁紹に仕えたが、官渡の戰いを前に諫言を呈するも聞き入れられなかった（『三國志』巻十二 崔琰傳）。他にも、袁紹は鄭玄を招聘しておきながら、禮遇しなかったという（『三國志』巻六 袁紹傳注引『九州春秋』）。

(27) 先主曰、袁公路近在壽春。此君四世五公、海內所歸、君可以州與之。……北海相孔融謂先主曰、袁公路豈憂國忘家者邪。冢中枯骨、何足介意。今日之事、百姓與能。天與不取、悔不可追（『三國志』巻三十二 先主傳）。

(28) 岡村繁「後漢末期の評論的氣風について」（『名古屋大學文學部研究紀要』二二號、一九六〇年二月）。岡村は、「今までの人物批評が、多く現實の社會や生活と密接な關係を以てなされたのに對して、これらの諸論は、決着がどう落ち着いてもさして現實生活に影響のない、現實から遊離した閑問題をとらえていること」「たとえ屁理屈を雜えても、とにかく理論的に說明しようとする意圖がはっきりと見えること」を指摘する。また、後漢末の政治的談論は、孔融が中心となっていたことにも言及する。

(29) 少府孔融上書薦之曰、……竊見故公車司馬令謝該、❶體曾・史之淑性、兼商・偃之文學、博通羣藝、周覽古今、物來有應、事至不惑、淸白異行、敦悅道訓。求之遠近、少有疇匹。……❷儁不疑定北關之前、夏侯勝辯常陰之驗、然後朝士益重儒術。今該實卓然比跡前列。……（『後漢書』列傳六十九下 儒林下 謝該傳）。これらはいずれも全文が長く、紙幅の都合上すべて載せられないため、特に評價に關わる部分を載せる。

(30) 子曰、直哉史魚。邦有道如矢、邦無道如矢（『論語』衛靈公篇）。『韓詩外傳』巻七によれば、衛の靈公に、賢人の蘧伯玉を登用して彌子瑕を退けるよう諫言を呈したが聞き入れられず、死に臨んでそれを悔やみ、喪を正堂で行わせなかったという。史魚の逸話は、後に『孔子家語』困誓篇にまとめられている。

(31) 『漢書』巻七十一 儁不疑傳に、「儁不疑字曼倩、勃海人也。治春秋、爲郡文學、進退必以禮、名聞州郡」とある。一方、同列傳に、「不疑曰、諸君何患於衛太子。昔蒯聵違命出奔、輒距而不納、春秋是之。衛太子得罪先帝、亡不卽死、今來自詣、此罪人也。遂送詔獄」とあり、この時に擧げた『春秋』は、『公羊傳』哀公三年を典據としている。したがって、儁不疑の修めた『春秋』は『公羊傳』と推測される。

(32) 會昭帝崩、昌邑王嗣立、數出。勝當乘輿前諫曰、天久陰而不雨、臣下有謀上者、陛下出欲何之。王怒、謂勝爲祅言、縛以屬吏（『漢書』巻七十五 夏侯勝傳）。

(33) 『後漢書』列傳七十下 文苑下 禰衡傳に、「唯善魯國孔融及弘農楊脩。常稱曰、大兒孔文舉、小兒楊德祖。餘子碌碌、莫足數也。融亦深愛其才。衡始弱冠、而融年四十、遂與爲交友」とある。孔融と禰衡の關係については、串田久治「孔融と禰衡」（『愛媛大學法文學部論集』文學科編 第十七號、一九八四年十月）がある。

(34) ……竊見處士平原禰衡、年二十四、字正平、淑質貞亮、英才卓礫。初涉藝文、升堂覩奧、❶目所一見、輒誦於口、耳所曾聞、不忘於心。性與道合、思若有神。❷弘羊潛計、安世默識、以衡準之、誠不足怪。❸忠果正直、志懷霜雪、見善若驚、❹疾惡若讎。❺任座抗行、史魚厲節、殆無以過也。鷙鳥累伯、不如一鶚。使衡立朝、必有可觀。……（『後漢書』列傳七十下 文苑下 禰衡傳）。この文は、『文選』にも收められている。

(35) 奉少聰明、自爲童兒及長、凡所經履、莫不暗記。讀書五行並下（『後漢書』列傳三十八 應奉傳）。

(36) 上行幸河東、嘗亡書三篋。詔問莫能知、唯安世識之、具作其事。後購求得書、以相校無所遺失（『漢書』巻五十九 張湯傳附張安世傳）。

(37) 魏文侯燕飲、皆令諸大夫論己、或言君之智也。至於任座、任座曰、君不肖君也。得中山不以封君之弟、而以封君之子。是以知君之不肖也。文侯不說、知於顏色。任座趨而出。次及翟黃、翟黃曰、君賢君也。臣聞、其主賢者、其臣之言直。今者任座之言直。是以知君之賢也（『呂氏春秋』不苟論）。

(38) 歲月不居、時節如流。五十之年、忽焉已至。公爲始滿、融又過二、海內知識、零落殆盡、惟會稽盛孝章尙存。其人困於孫氏、妻孥湮沒、單子獨立、孤危愁

苦、若使憂能傷人、此子不得復永年矣。……今孝章實丈夫之雄也、天下譚士依以揚聲、而身不免於幽執、命不期於旦夕、❶是吾祖不當復論損益之友、而朱穆所以絶交也。公誠能馳一介之使、加咫尺之書、則孝章可致、友道可弘也。……（『三國志』巻五十一　孫韶傳注引『會稽典錄』）。

(39) 孔子曰、益者三友、損者三友。友直、友諒、友多聞益矣。友便辟、友善柔、友便佞損矣（『論語』季氏篇）。

(40) 九品中正制度における世襲制と爵位の關係については、渡邊義浩「西晉における五等爵制と貴族制の成立」（『史學雜誌』第一一六編第三號、二〇〇七年三月。『西晉「儒教國家」と貴族制』、汲古書院、二〇一〇年に所收）を參照。

(41) 謝該・禰衡・盛憲の他、孔融は桓典とともに趙岐を「博古」と評して推薦した（『北堂書鈔』巻三十三）。また上書ではないが、孫吳政權の初代宰相を務めた孫邵を、「郎廟之才」と評している。これら短い文言だけで判斷するのは難しいが、いずれも「汝潁優劣論」の基準より外れる。かかる例外はあっても、謝該たちのように、共通の基準を示した文書があることは確かで、實際の人物推薦の際に機能していたと言える。

(42) 兪紹初輯校『建安七子集』（中華書局、一九八九年）は、謝該の推薦文を建安三（一九八）年、禰衡のそれを建安元（一九六）年の成立とする。これらは「汝潁優劣論」より先行し、盛憲の推薦文だけが後行となる。とはいえ、論文と推薦文、成立の先後を問わず、共通項が見られるのは、孔融の評價基準の一貫性を示すものであろう。

(43) 『後漢書』列傳六十　孔融傳に、「初、京兆人脂習元升、與融相善、每戒融剛直」とある。孔融の殺害について、渡邊義浩「三國時代における「文學」の政治的宣揚――六朝貴族制形成史の視點から――」（『東洋史研究』第五十四巻第三號、一九九五年十二月。『三國政權の構造と「名士」』、汲古書院、二〇〇四年に所收）は、獻帝との親密性および曹操と敵對する劉備や、孫吳人士にまで連なる交遊關係の廣さに、曹操が危險性を感じたことに原因を求める。